コレクター・プライズ 結果発表

3331 ART FAIR
Organized by 3331 Arts Chiyoda

長瀬千雅［長瀬 千雅賞］

楊珪宋（メインギャラリー）

横浜・黄金町の歴史を少しでも知っていれば、引っこ抜かれていたタンポポをアーティストである作者がどんな気持ちで眺めていたのだろうと思うと思います。
絵じゃなくて陶なのがいいなと思いました。なぜなら生っぽさが減るからです。いや、表面がつやっとしているところがなまめかしくもあるんですが、なまめかしいけど生々しくないというのは成立するような気がします。
そういうことじゃなくて、オブジェと絵の中間みたいな感じが好ましいと思ったということが言いたかったのでした。

李晶玉（メインギャラリー）

この作品を見たとき、ものすごくきれいだと思いました。衣服のプリーツやドレープが美しくて、女性の背後にのびる地球の表面みたいな面が透けてるところもよくて、ずっと見ていたいなと思いました。
これで完成なのか、もっと描き込まれて色がのっていくのか、それはよくわからなかったのですが、そんなことどっちでもいい、この作家ならよい塩梅のところで筆を止めてくれるはずだと思いました。
いろいろあるけど、グレたり群れたりせずに、自分は自分でいようと思いました。

中村政人［中村政人賞］

大久保あり（メインギャラリー）

近藤正勝（メインギャラリー）

藤浩志（メインギャラリー）

堀浩哉（メインギャラリー）

鎌江一美（体育館／やまなみ工房）

菊地暁子（体育館／秋田公立美術大学）

長屋博［長屋 博賞］

富田正宣（メインギャラリー）

西山沙樹［3331 西山沙樹賞］

宮北裕美（メインギャラリー）

宮北さんの洗練された手首と手先のしなやかな動き。歳を重ねていくごとに身体がだんだんと固まってゆき、自由がきかなくなっていくことをここ数年で感じてきたこともあり、その動きに自由と解放感を感じさせられました。そして、２枚の写真にとらえられたその洗練されたしなやかさ、力強さ、そして風の流れ、時間の流れがとても美しく自由で、ずっと見ていたいと思いプライズとさせていただきました。宮北さんのパフォーマンスを拝見させていただく日を楽しみにしております。また、これからのご活躍を応援しております。

西山学［西山 学賞］

村山悟郎（体育館／東京藝術大学 中村研究室）

村山さんはオートポイエーシスやセル・オートマトンなどを応用して制作する理論派の作家。設定したルールに従って絵画を描いている（織物絵画もある）。しかしそこから出てくる表現は有機的な形状であり、その知覚的情動性をなぜルールが作るのかを追求しているように見える。
繰り返しとそのズレが織り成す表現から琳派を感じるのは何故だろう。

パトロンプロジェクト 菊池麻衣子
［パトロンプロジェクト 菊池 麻衣子賞］

堀貴春（メインギャラリー）

抜けるように白くエレガントな蜘蛛が一周目から心に刻まれました。
高校生の時から陶芸家になると決めて窯業を専門的に勉強した堀さん。影と造形の美しさを際立たせるために、ハイレベルな白磁を選択。堀さん曰く『継ぎはぎで作るのは誰でもできるけど、全てひと繋がりの白磁で蜘蛛を作るのはなかなかできることではなく、よく驚かれる』とのこと。この精密な立体感は、宮川香山の超絶技巧も思わせつつ、抜けるホワイトがコンテンポラリー。家を守ってくれるよい虫としての蜘蛛も嬉しいです！インスタに作品をアップすると海外からアートフェア出品のオファーもあって実現しているとのこと。実は、実用的な器でも透けるように薄く美しい作品で活躍している堀さんが、コンテンポラリーアートの分野でも活躍なさることを楽しみにプライズとさせていただきました。

林暁甫［林暁甫賞］

西永怜央菜（メインギャラリー）

清山飯坂温泉芸術祭でも作品を拝見させて頂いていて、状況と場所を可視化させるユニークな作品に興味を持っていました。今回の作品を拝見して、改めて作品づくりに向き合う日々の話を聞いてみたく選ばせていただきました。ドーナツでも食べながら。

アーツカウンシル東京 ROOM302（教室）

10年という活動の積み重ねをまとめてくれる貴重な機会だった。「東京」という多様性を内包し続け変わり続ける場所に、アートという視座で向き合い、生み出す価値が続いていく事を願っています。

林直樹［ガラパゴス N 賞］

大久保あり

平面や立体ではないものの内でいろいろな要素のつまったもの、想像を超えているものがありそうな。

彦根延代［実現したかったで賞］

持田敦子（メインギャラリー）

持田敦子「それはいかにして起こらなかったか」
今回私は 3331 側のいちスタッフとして、3331 ART FAIR 2019 への作品出品に向けて、持田さんがご提出下さった複数プランの検討と実現の可能性について、時に当事者となりながらも逐次状況を見守る立場にありました。少しネタバレになってしまいますが、持田さんがイメージしていた本来の作品プランは、3331 の場所性や歴史を踏まえて考え抜かれたとても大がかりな作品でした。高さ数 m にも及ぶそのスケール感もさることながら、実現したら相当な見応えと“体験のしがい”がある、可動式の作品になる予定でした。残念ながら今回のフェアでは実現に至らなかったのですが、持田さんはこの「実現しなかった作品プラン」について、その経緯や各種調整のやりとり、人との関わり（私自身も含む）、持田さんが費やした時間までをも取り込んだ、≪それはいかにして起こらなかったか≫という作品に見事に昇華して下さいました。この度、できあがった作品を拝見し、迷わず購入させて頂くことに決めました。（私以外にこの作品をわかる人はいない！という不遜な思いもありましたが…）

風澤俊一［風澤 俊一賞］

三原回（美学校／体育館）

Cool!